

Title	ANATOMY AND PHYLOGENY OF THE SINISTRAL FLOUNDERS OF JAPAN(Abstract_要旨)
Author(s)	Amaoka, Kunio
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1967-07-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/212304
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

【301】

氏名	尼岡邦夫
	あま おか くに お
学位の種類	農学博士
学位記番号	農博第83号
学位授与の日付	昭和42年7月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第1項該当
研究科・専攻	農学研究科水産学専攻
学位論文題目	ANATOMY AND PHYLOGENY OF THE SINISTRAL FLOUNDERS OF JAPAN (日本産ヒラメ類の解剖と系統)

論文調査委員 (主査) 教授 松原喜代松 教授 木俣正夫 教授 川上太左英

論文内容の要旨

本論文は日本の周辺海域から採集した20属40種のヒラメ類を比較解剖し、さらにその結果にもとづき、この類の系統・類縁関係を推定したものである。比較解剖では、ずがい骨・眼骨・さいは・さいこ・尾舌骨・脊椎骨・尾びれの軟条などについて種間変異を確かめている。

ヒラメ類の体はふ化当時では左右相称であるが、右の眼が頭の左側に移るとともに、ずがい骨が左によじれるので、左右不相称になる。したがって、ずがい骨における種間変異とその傾向を確かめることは、この類の系統・類縁を推定するうえに、はなはだ重要であると考えられる。著者は、ずがい骨を構成する各骨の配列状態にいちじるしい種間変異のあることをたしかめ、その変異傾向からこの類をボウズガレイ型・コケピラメ型・ヒラメ型・ダルマガレイ型に大別した。ボウズガレイ型魚類はこれらの形質でズスキ型魚類とかなりよく一致することから、ヒラメ類の基本型であるとし、コケピラメ型・ヒラメ型などの中間型を経てダルマガレイ型へと特化していったと推論した。ヒラメ類はその他の形質においても、さいはをのぞくと、ずがい骨におけるとほぼ似た種間変異をしめし、その変異傾向から著者はボウズガレイ型はヒラメ類の基本型であることを明らかにした。さいはは重要な分類形質となるが、系統的価値が少ないと判断した。

このように著者は従来、研究されていなかった多くの器官を比較解剖したが、さらにその結果得られた形態学的新知見にもとづいて考察し、この類がズスキ類と共通の祖先型から累進してきたと推定した。またこの類の推定系統樹を設定し、この類にボウズガレイ幹・コケピラメ幹・ヒラメ幹・ダルマガレイ幹の四つの大きい系統幹を認め、これらをそれぞれ科の階級においた。ダルマガレイ幹にはさらに六つの亜幹が認められるとし、それらの間の類縁関係を論述した。

論文審査の結果の要旨

ヒラメ類の系統・分類に関する従来の研究は少なくないが、それらは主として外部形態にもとづいて行

なわれてきた。そのため、この類の分類体系にはかなりの混乱が認められた。著者は日本各地から採集した多数の標本により、日本近海産のほとんど全種類について、従来ほとんど研究されていなかった多くの内部器官を比較解剖し、それらの諸形質における分化の傾向とその生物学的意義について論じている。そしてその結果得られた形態学的新知見にもとづいて、この類の起源を追究するとともに、科間・亜科間・属間の類縁関係を推定し、系統樹を設定し、かつ新分類体系を樹立した。

とくに、ずがい骨の重要性に着目し、それを構成する各骨の形態や配列に系統的な種の変異があることを確かめ、この変異が眼骨・脊椎骨その他の器官における種の変異と傾向的にほぼ並行的であることを明らかにしたことは高く評価されてよい。また、この新知見にもとづいて、この類の起源と基本型を推定するとともに、この類に四つの大きい系統幹を認め、各幹に属する属間の類縁関係をさぐって、ヒラメ類の新分類体系を樹立したことは、魚類の系統分類学の発展に対する大きい寄与である。

よって本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。